

1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私 (2)

松本和一郎

(1966年度入学、1970年度学部卒業、1971年度大学院進学、1974年度同退学)

1. 3回生

当時は3回生から学科分属するから、数学科においては教官の方々とも先輩の方々とも初めての対面となる。私たちが進級した年までは先輩と後輩の間が親密で、4回生が新数学科生の歓迎会を開いて下さった。(翌年以降の制度変更については次の次の回に説明する。) コンパもあったかもしれないが、記憶に残っていない。記憶にあるのは、御所のグラウンドで教官 vs 学生の野球の試合をしたことであった。教官側は教授では楠先生と永田先生が参加された。助教授や講師・助手の方々もいたと思うのだが、どなたがいたか思い出せない。楠先生が教官側のピッチャーをされた。三高野球部だったそうで、いい球を投げられた。吉沢先生はこういうものには参加されないとのことであった。また、溝畑先生はぎっくり腰で自重されたそう。

専門教育となると、当たり前だが毎日数学関係の授業ばかりで、ついていくのに汲々としていた。それでも、先生方の個性がにじみ出た講義スタイルに触発されてぐいぐい引き込まれる日々であった。

「代数Ⅰ」は永田先生の担当であった。黒板に小さい字で少し書いてからこちらを向いてニコニコ笑いながら首を縦に数度振られる。つい、その首にシンクロしてこちらも首を縦に振ると、次ぎに進まれる。あ、質問したかったのに、と思っても後の祭りである。たまにその流れに棹さして質問すると、「だってそうでしょ」とおっしゃる。「だってそうでしょ」で得心がいくならはじめから質問しないですよ、と言いたかったが、口に出す勇氣はなかった。

「代数Ⅱ」は宮西先生の担当であった。綿密なノートをお作りになっていた。流れるように講義が進むので、立ち止まって少し考えないと腑に落ちないレベルの者にとっては厳しかった。

「幾何Ⅰ」は小松先生の担当であった。ホモロジー群についての講義で、英語の教科書であった。百万遍を少し東に入った北側(吉岡書店のすぐ近く)に濱野書店という小さい本屋さんがあって、いつも着物姿の小柄なおばさんが一人で店番をしていた。息子さんが私たちと同じくらいの歳で、京都大学の農学部に入られたそう。京大生をとてひいきにしてくれて、私たちには本代を1割5分くらい引いてくれた。古くなって表紙が日に焼けた本は古書扱いにしてくれてずいぶん安くしてくれた。これで儲けが出るのかと訝ったほどである。英語の本も扱うか聞いてみると、取り寄せてくれるとのこと。希望者が十数人になり、教科書“cell complex”をまとめて注文した。入荷したとの連絡

があったので取りに行くと、「生物学の本ですか？」と聞く。英語の本の注文があると、どの専門の本か、タイトルを辞書で引いてみるそうで、cell が細胞だから生物学だと思ったそうだ。注文された本をただ取り次ぐだけでなく、こういう会話があるから3回生以降は専門書はほぼ濱野書店で買った。

小松先生には高校の教員免許のための「教科教育法」も持っていていただいた。この講義の冒頭で、「私は数学教育学の専門家ではありませんから、本格的な教科教育法は教えられません。ここに、ソ連で行われている中学生の数学オリンピックの問題が10問ありますから、どれか1問解いてレポートとして持ってきてくれたら単位を出します」とおっしゃった。中学生向けの問題なんて楽勝！と思ってほくそ笑んでいたがこれがとんだ見込み違い。どの問題も難しいのである。1週間かけて初等整数論の問題をやっと1問解いてレポートした。(数学オリンピックは始めはソ連国内のコンテストであった。国際的な行事になったのはずっと後である。)

「幾何 II」は戸田先生の担当であった。基本群のあたりは良かったが、ホモトピー群の本格的な展開となると私は五里霧中に立つことになった。

「集合と位相」の担当は足立先生であった。この科目はなんとか分かった。しかし、「位相」の感覚が分かったのは、4回生の末に3ヶ月だけ永田先生の弟子であったときであった。「取東中級数環の位相と形式的中級数環の位相の違いが分かりますか」と問われ答えられなかったのだが、そのときの先生の説明で「位相とは何でどう扱うものか」が分かった。

「数学解析」は吉沢先生の担当であった。吉沢先生は教科書の出版予告を何度かされて、すべて出版に至っていなかった。私たちの講義を担当されたときは、今度こそ出版するぞとの意気込みで、講義の後に、きれいにまとめてある竹中君のノートをコピーして着々と資料をため込まれていた。結局、今回の準備も実を結ばなかったのだが、その理由は次の回を読んでいただいたら分かる(と思う)。要するに、教科書を書くよりもっと「大切な」(もっと「興味を持てる」)ことに忙殺されたのである。吉沢先生を「忙しくしてしまった」のは私たちであった。

吉沢先生の講義中に“狭いコンティニューアス”と繰り返される。教養3組以来の親友伊吹君に「先生は“狭い”と言うけれどむしろ広いのではないか？」と聞いたら伊吹君は一瞬変な顔をして「松本、“狭い”ではなく“semi”ではないか？」と言った。英語力がないということは悲しいことである。

「複素解析」の講義は楠先生の担当であった。この講義が私には一番良く分かったし、のちのち、偏微分方程式を研究するようになって、習ったことを大いに使っている。

その他にも、後期に溝畑先生が複素領域での常微分方程式のフックスの理論を講じて下さったが、講義名は忘れた。講義はこの他にもあったかもしれない。

演習は主に年齢が私たちに比較的近い助手の方々が指導して下さった。また授業形態の性格上、会話を多くするので、親近感が湧いた。演習は小人数にするために1学年を3分割あるいは2分割していた。私は、代数学演習は隅広さん、幾何学演習は土屋さん、解析学演習(実解析)は泉さん、複素解析学演習は三木先生にみてもらった。三木先生

だけは立命館大学の先生で、非常勤講師であった。ちょび髭を生やしておられて独特の雰囲気である。他の3方は助手であった。助手の人を“先生”と呼ぶとしかられた。「国會議員も“センセイ”と呼ばれる、あんなものと一緒にするな」と言われた。そういうものか、と思って、学生同士で話をするときは教授の方々も「永田さん、溝畑さん」などと呼んでいた。

隅広さんは手堅く、かつ静であった。土屋さんはヒラメキ派で、私が演習問題にへんてこりんな解答をすると、「だって変でしょ。あれがこうであんなんだから。あれ、僕分かんない。」と独りで突っ走られて私はただ呆然としていた。泉さんは騒々しいところが好き、とのことであった。田舎育ちの私には都会派の感性は理解の外であった。三木先生は私が黒板で最初に解いた問題の解答を褒めて下さった。沈没しそうになっていた私はやっと一息つけた。

年が近いせいも、助手の方々は兄貴のような気がして、科目を担当していただかない方々とも親しくしていただいた。山口博史さんとはどういうきっかけであったか覚えていないが、下宿にお邪魔するほど親しくしていただいた。4回生の冬であったと思う。次回述べる長期ストライキの明ける前後であったか。伊吹君と何となく山口さんの下宿に行くと、とてもいい匂いがしている。同じ下宿の方々3人でビフテキを焼いている最中であった。ちょうどボーナスが出た日だそうである（この頃はまだ現金支給であった）。「あ、ちょっと待っててね」と言ってあと2枚ビフテキ用の肉を買ってきて下さった。（少なくとも私は）何も考えずにごちそうになったが、後で考えるとあの頃の助手の安い給料では、もらったばかりのボーナスは想定外のビフテキ2枚追加でほぼ消え失せてしまったのではなかろうか。（その頃は助手の給料も学生の奨学金も極めて安かったが、私が大学院に入る頃から段階的にそれらの大幅な増額がなされ、私はいつも裕福な額の恩恵を受けることができた。）学生が自腹でビフテキを食べるなどということはありませんでした。時代であったから未だに覚えている。

のちのち私の研究に多変数の関数論の知識が必要になると、山口さんや寺田さんに教えてもらった。寺田さんは、絵を描いて「直感的にはこうなっているんだよ」といつてから、「証明はこうすればいい」と教えてくれた。とても分かり易く自信を持って研究に使うことができた。しかし、「実軸の上でこういう性質があるのですが、実軸を含むセクターでこれこれのことは成り立ちますか？」と聞くと、「実軸の上だけという変なところで条件を与えられると使いにくいなあ」とこぼされた。複素解析にとって、“実軸の上”が変な集合だという感覚は分かるのだが、実解析の私にとっては仕方のないことである。西野先生は私の質問に対して「これくらいのことに解答が出せないようでは多変数関数論も情けない」とおっしゃるので、私の方が恐縮した。

いろいろあって私は5回生を経験したのだが、5回生の時に、その年から3回生向けの演習を再編成して設置された“演義”のうち、定松さん担当のものを履修した。Petrovskyの常微分方程式の英訳教科書を読んだ。この本は私の研究スタイルに大きく影響した。大学院に進学していた伊吹君も一緒だった。正規の3回生では浦部君と大藪君が一緒だった。大藪君は瑞々しい感性で期待していたが医学部に転学部した。定松さんは演義が終

わるとしばしば「焼肉を食べに行こう」と誘ってくれて、百万遍から西北に入っていく道の「三高餅食堂」の隣にあった焼肉屋に行った。もちろん払いは定松さんで、大食漢の私は大いに助かった。方程式 $y' = f(x, y)$ のあらゆる点 (x_0, y_0) から出る解が全て一意でない例を構成した論文があり、私がレポートすることになっていた。レポートする回の直前に親父が交通事故で亡くなって、しばらく宮崎に帰っていたのでそのレポートはせずじまいだった。

内山さんはなぜか私の視野の中央にはいないが、視野のどこかにいつも入っていた。友達の下宿で話し込んで腹が減ると、遅くまで開いている中華料理屋に行った。銀閣寺のあたりであるとミンミン（王偏に民と書くミンだがうまく文字変換できない）によく行った。午前0時前後だと必ず内山さんが座っていて、競馬新聞を読んでいた。競馬で勝てるんですかと聞くと「まあまトントンかな。しかし競馬会が馬券代の3割と取っちゃうから、トントンでもいい方なんだぜ」との答えが返ってきた。内山さんは麻雀も将棋も碁もパチンコも強く、同じく勝負事に強い西田吾郎さんと「近代5種はこの5つでいいか、競馬をはずして花札を入れるか」などと軽口を楽しんでいた。

[思い出： コンパ]

私たちが学生の時は結構しょっちゅう“コンパ”をしていた。そして、コンパといえば“すき焼き”でそれ以外は考えたこともなかった。最近では“鍋奉行”という言葉が定着したが、その昔でも“世話を焼く者”と“ただ食うだけの者”と2極分解する。世話を焼く者が肉を入れたりネギを入れたり水を足したりしている間に、ただ食うだけの者が牛肉を平らげてしまう。不満が出て、結局「鍋全体が出来上がるまで手を出してはいけない、ただ食うだけの者は肩を組んで手を出せないことを明示する、鍋全体が出来上がって世話を焼く者が“ヨシ”と言った途端に取り放題好き放題とする」と合意した。こういうときは「ガメツイ」ことで有名な大阪人が一番牛肉を確保するかと思いきや、“おっちゃん”こと上田君は「あー、モウ肉あらへん」といって白菜ばかりの器を抱えている。意外と東北出身者は手堅く牛肉を確保していた。

コンパといえば“天寅”とのことだが、私は今日に至るまで未だに一度も天寅に上がったことがない。先日も天寅の前に京大の応援団が直立で並んでいる。OBか上級生がでてくるのであろうな、と思って「縁はないけど天寅さん健在おめでとう」と思った。

4年前まで京都大学の非常勤講師として1回生に数学を教えていたが、受講生と親しくなった学年では学生のコンパに招かれることがあった。しかし、料理がすき焼きだったことは一度もなかった。串焼きとか焼き鳥とかお刺身コースとか、昔の学生には手の出ないものばかりである。「戦後は終わった」と実感した。

2. それはひょんなことから始まった

このセクションからは1969年における京都大学理学部数学科の10ヶ月に及ぶストライキとそれを取り巻く理学部あるいは京都大学の動きを、私の知る限りにおいて書

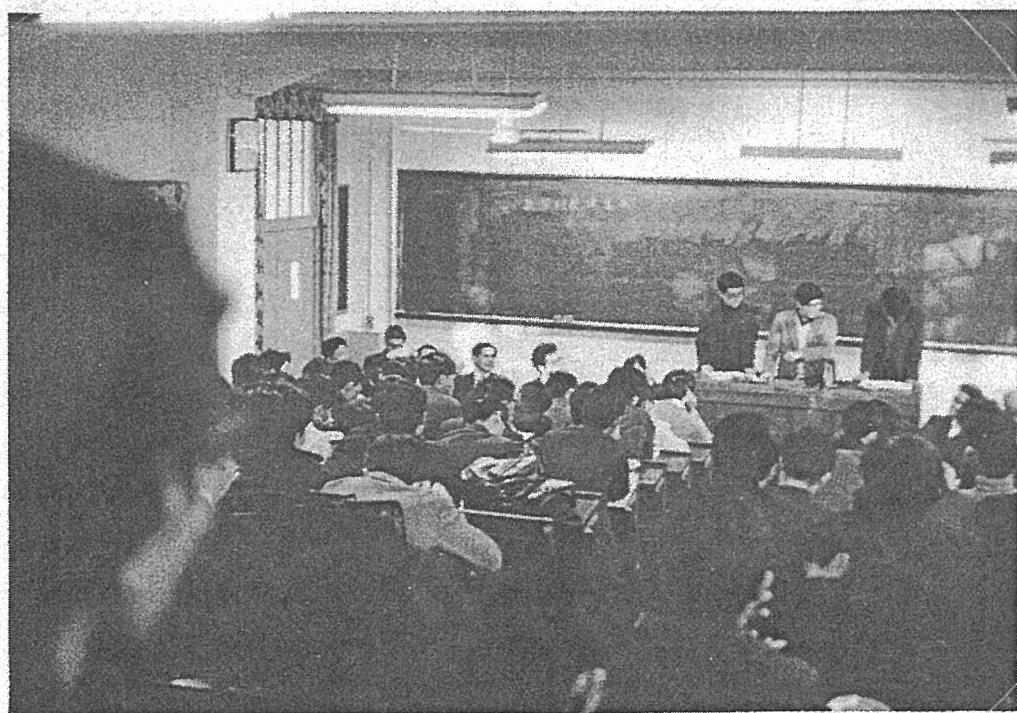
き記す。私は日記をつけないから、以下に書くことの日時・一部の前後関係・名称呼称は必ずしも正しくないかもしれない。また、いくつかの勢力の厳しい対立の中にあつた時代なので、何でも見聞きできたわけではない。あくまでも「私が見聞きしたこと」に限る。したがって、違う視点に立っていた方々や、同じものを違う位置からみていた方は全く違う記憶を持っておられることもあるかと思う。そういう状況の時代のことに関する文章であることをお断りしておく。

1969年の冒頭である。専門に上がって教養部とは縁が切れたので、教養部で何が起きているのか皆目実感を伴って理解していなかった。もちろん、何かの理由があつてだとは思ふが、教養部が封鎖されていたこと、教養部に警察隊が入つたこと、それに抗議して教養部学生部長である作田先生が時計台前でハンストをしていたこと、それに先だつて東大安田講堂に東大全共闘・三派系全学連を中心とする学生が立てこもり、封鎖解除を目指す機動隊と2日間に及ぶ攻防戦を繰り広げたこと、パリのカルチョ・ラタンで学生が道路の敷石を剥がして投石していたことなどはバラバラには知っていたが、全く結びついていなかった。

東大安田講堂の攻防戦の興奮がさめやらぬ1月も押し詰まったある日、永田先生の代数Iの期間外試験が予定されていた。永田先生の代数Iは必修科目であるが、なかなか合格点がもらえないことで有名であつた。合格率が低いから、期末試験は期間外・追試も入れて3回ほどあつた。それでもかなり多くの学生が単位の取得に失敗していた。ガロアの理論を講義されるのだが、試験は「これこれの群からそれぞれの群への準同形の濃度を求めよ」というようなもので、面食らうのである。永田先生は、群や環の準同形を正しく理解できれば代数を理解したことになる、と思っておられたのではないだろうか。さて、その期間外試験の日に永田先生は名古屋大学に出張が入つてしまい、試験監督をある先生に依頼した。マンの悪いことに、その期間外試験の日に当時の民青系の自治会による1日ストが行われることになった。民青系のストだから要求も諸要求で、ストを背景に大学当局と話し合いができれば良いのであつて、このストを日を越えて継続する気はまるでなかつた。我々も、スト権が確立したわけだから授業はないが、ちょっと様子を見に行くくらいはせんといかん、くらいの軽い気持ちで集まつてきた。ところが、スト中なのに期間外試験をどうしてもやる、と言つてるらしい、それはなんとしても阻止しなければ、となつて、みんなだんだん興奮してきた。ピケットラインを張つて実力阻止を図つたが、試験を強行されてしまった。(2名受験したようであつた。)そこで、急遽、数学科3回生の学生集会が開かれた。ストを提案した民青系の学生は想定外も外の事態の展開に尻込みをして穏便に済ませたいとの意向が強かつたが、かえつて一般学生は激高して全共闘系学生の主張になびいた。私もなびいた一人であつた。全共闘系学生(数学科闘争委員会)の主張に乗つて、「1. スト破壊に対して教官団としての謝罪を要求する、2. 謝罪があるまではストを継続する」ことが決まつた。ここまでは、成り行きであつたが、「納得のいく回答があるまでは妥協してはいけない」という声が出て、付帯事項として「数学科3回生全学生の2/3以上の賛成をもってストライキを解除できる」も決まつた。(本当はもっと複雑なことが決まつたのだが、本質的にこの理解

でよい。) 勢いでそう決まったが、付帯事項は重たい。理学部の学生大会の定足数は全学生の1/3であり、農学部は1/6であった。(1069年のように学生の意識が高揚しているときは農学部では同日に2つの学生大会が成立して、全く異なる方向の決議がそれぞれ採択されてしまった、ということが何度も起きた。) 定足数が低いのはそれぐらい低くしておかないと学生大会が成立しないのである。それなのに、出席者の2/3でなく「在籍者の2/3の賛成をもってストライキを解除できる」となると、まず在籍者の2/3以上を学生集会に集めなければならない。冷静ならばこのような無謀な決議はしないのだが、なにせ一度も経験したことのない“スト破り”に会ってみんな気持ちがうわずっていたのである。多分、全共闘系の学生諸君も、解除できないストに仕立てて、機動隊の導入を余儀なくし、「権力による弾圧・スト解除」を勝ち取る(?) というところまでは考えてなかったのではないだろうか。ひよんなことから無期限ストライキに突入してしまった。

無期限ストに突入して“スト破りに対する抗議集会”を開いて“謝罪要求”をするのだが、案の定、教官側は謝罪しない。「何が悪いか」という高圧的な態度でもないが、「スト破りは悪かった」とも言わない。(私の記憶では、この頃は私はまだ集会の中央にはいなかった、と思っていたが、同窓会設立総会の懇親会の折の写真パネルを見ると、しっかり壇上に登っていた。第3講義室の教壇上にいるのは、中央が天野君、向って右が加古君、そして左が私である。私以外は数学科闘争委員会のメンバーで、私は“一般学生”であった。“市民の権利”を侵されることに強い反発を感じる私は初期から壇上に登っていたようである。記憶は必ずしも正しくない、と再確認した。)



勢いで無期限ストに突入したのだから、学生側にも準備が無く、何をして良いか分からない。とりあえず謝罪を求めて団交をするしかない。しかし、教官側が“団交”という呼称を認めない。すったもんだする中で、実に日本的に、学生側は勝手に“団交”と呼ぶが、教員側はあくまでも“全体集会”と呼んで統一ははからない、という玉虫色で決着した。

いよいよ第1回の“全体集会”の日のことである。我々は通常第5講義室（今の談話室）にたむろしていたのだが、竹本君が飛び込んできて「松本、エライこっちゃ、教官がヤクザを連れてきた」と叫ぶ。なんぼなんでもヤクザは連れて来まい、と思ったがとりあえず第3講義室に行ってみた。「どこに？」と聞くと「あそこ」。指の先に大柄ではないが眼光鋭く驚鼻で引き締まった体に革ジャンの青年が壇上の椅子の上に踏ん返り返っている。「あれ、ヤクザかなあ？」といぶかっていると、誰かが「あれは土方助教授だ」と言う。授業を持ってもらっていませんでしたので知らなかっただけである。

第1回の全体集会には、東大から数理解析研究所の所長に着任したばかりの吉田耕作先生も壇上にいた。なお、この年の学科主任は吉沢先生である。教官側からの意向で集会の議長は学生から出すことになった。多くの学生の支持で河村君が議長になった。なかなか、冷静公平な議事進行であった。

冒頭、吉沢先生が「君らはこの集会で何を議論したいのか」と問うた。全共闘系の学生諸君が口火を切る端を抑えて某君が「僕はこんなつまらないことで時間を失いたくないのです。勉強したいのです。」と発言した。同時に吉田耕作先生が立ち上がって「君は偉い！」と叫んだ。しばらくシラーツとした空気が流れた後に、何事もなかったように“スト破りの謝罪問題”が議論されだした。吉田耕作先生は第2回からは出席されなかった。

この集会は、第1回からかは定かでないが、録音機で録音されていて、テープ起こしをして一言一句漏らさない詳細な議事録が作られた。私は後にすったもんだの末大学院に入り博士課程まで進んだのだが、D1の時に初めて日本数学会の一般講演をした。講演を終わって壇を降りると、一人の人が近づいてきて「あなたが松本さんですか、ご専門は知りませんが、お名前だけは知っています」。吉沢先生はこの議事録を“学生と教員が有意義な議論をしている貴重な記録”として全国の大学に送ったらしい。次回書くように、しだいに全体集会に全共闘系の学生が来なくなり、いきおい学生の側の私の発言が多くなり、議事録は「発言：吉沢、発言：松本、発言：吉沢、発言：松本、…」となってしまった。そのせいで、「何を研究しているか知らないが、ようしゃべる松本」の存在が全国に知れ渡ったらしい。